

## 8月のGlobal Session (2025)

期日：2025年8月31日（日）10：30～12：45

場所：ギャラリー3階 会議室

ゲスト：大橋晶子さん（元京都新聞記者）

タイトル：「パレスチナ、イスラエル、そして私たち」

コーディネーター：亀田博さん

主宰：オフィス・コン・ジュント

参加者：15名

亀田さん（コーディネーター）：今日は、暑いなか、参加していただきありがとうございます。今日は大橋晶子さんの「パレスチナ、イスラエル、そして私たち」というタイトルですが、毎日テレビで、問題を見ていますが、今日は、お話を聞きながら、自分の目で見られるようになったらと思います。これは、仕事ではなかったのですか？

大橋さん：元記者ですが、これは、私的に行った旅です。

亀田さん：今朝、一番のニュースもイスラエルのイエメン空爆でした。パレスチナでは、子どもが餓死しているとも。

では、お話を聞く前に、自己紹介をお願いします。

S・Hさん：はじめての参加です。以前からお知らせはもらっていましたが。最近、自分でワイマールについて調べています。38年間中国語の学校を主宰し、1200名以上の方に教えてきました。その間、大学で、非常勤ですが、週に4クラスを持ち、25年間教えていました。今も個人クラスをやっています。1978年に初めて中国に行き、1980年から81年まで北京語源学院に留学していました。

M・Yさん：中国が好きで、20回以上訪ねています。中国語も北京大学や、上海に短期留学をしました。また、中国へ行こうと思っていますが、モバイル決済なので、いろいろ学習しなくてはなりません。

N・Tさん：この名字が気に入っているので、結婚後も仕事ではこれを替えずに使っています。小学校や、特別支援学校で支援員をしています。南丹市で、外国につながる子どもの支援活動もしています。

T・Tさん：左京区に住んでいたころは、旅行代理店をし、外国で何かをしたい人のヘルプをしていましたが、2000年に亀岡に帰り、河原林町でホームステイの受け入れなどをして25年目になります。自分が、外国と接点のある仕事をしたかったのです。キューバに行ったら、人々はたいへんな生活をしていて、忘れられた国といえるかもしれません。何かをしたいとギャラリーに来たら、このGlobal Sessionを紹介され、参加しました。

K・Tさん：映画の制作や、脚本家をしています。9月にアイルランドの映画祭にノミネートされ、待ち遠しいです。今日は、パレスチナなどのことも知りたいと参加しました。

C・Y さん：2005 年に日本に来て、2024 年 5 月に大阪から亀岡に来て、パナソニックデバイスコンポーネントという会社にいます。天津出身で、短大を卒業して、工場に行っていましたが、その間日本人に会い、日本語を学び始めました。その後、日本に来て猛勉強し、大阪市立大学法学部に合格し、卒業しました。この Global Session ははじめてですが、ひまわり教室で、中国出身の子ども達の学習を手伝っています。

児嶋（2026 年 2 月のゲストは、この C・Y さんです。）

M・F さん：今日は、GS が初めての方も多いようですが、私は、GS の始め頃から参加しています。仕事は、映画制作の仕事をしていて、今は、子ども達に映画制作なども教えることをボランティアでやっています。最初の GS は、外国人のゲストが多く、英語でやっていました。いつの間にか、外国の方も日本語がうまくなり、日本語で続いていますね。

児嶋（1999 年から開始し、そのころは、英語なので、英語の勉強と思って参加していた人も多かったですね。）

R・S さん：ひまわり教室の指導をしています。『夜と霧』を高校の先生に言われて 50 年前に読んだことを思い出していました。ユダヤ人の虐殺についてでしたが、ずっと心に残っていました。今日の「パレスチナ、イスラエル、そして私たち」の GS のタイトルを見て、自分は何もできないのかとか、出口が見えない状況を考えてきています。

N・K さん：小学校の教員をしていて、今は、ひまわり教室に関わっています。ニュースを見ると、どれが正義かとか、歴史を遡って考える必要があるなと思います。いろいろな事を知りたいと参加しました。

Y・H さん：総合商社に勤務していましたが、今は無職で、GS によく来ています。現地に行かれたゲストから、生の経験をお聞きしたいと参加しました。

E・O さん：先日、コロナにかかり、大変でした。仕事は JT の子会社に勤務していますが、メンバーが変わったり、いろいろ大変でしたが、少しずつ慣れてきました。8 月には父が入院したりと大変でした。今日は、できることは何かを知りたいと思っています。

M・S さん：ひまわり教室の指導者もしています。GS も長いです。数年前に綾部市と大本教の主催で、中東和平プロジェクトに参加し、初めての取り組みでした。イスラエルのどんどんひどくなるやり方に胸が痛くなります。何ができるかを考えていきたいと思っています。

児嶋：この GS は、いつも言っていますが、亀岡交流活動センターに勤務していた 1999 年に開始し、2011 年に退職後は、オフィス・コン・ジュントの主宰として継続しています。20 数年経ってしまいましたが、最初からの方もいらっしゃるし、これからも毎月 1 回継続し、その後、レポートも書き、みなさんにお送りしています。今日もよろしくお願いします。

亀田さん：大津市に在住です。GS のために 1 ヶ月に 1 回は、亀岡に来ています。23, 4 年前に先ほど M・F さんが言われたように英語でのセッションという形で始めましたが、ゲストも外国人で、英語のテキストは 3, 4 ページもあり、GS までに準備が大変だったことを覚えています。

M・S さん：コロナ前の数年前に、イスラエルとパレスチナから、中学生が来て、当時の交際交流員であったサムさんのコーディネートで、いろいろな発表をしたことを覚えています。

大橋さん：今日は参加していただきありがとうございます。

この地方には 3 回行きました。1993 年のオスロ合意前、暫定自治が始まった 1994 年から 95 年の年末年始と、1996 年のゴールデンウィーク中です。このほか、ゴラン高原からイスラエルが破壊したシリアの街クネイトラが見えて訪ねたくなり、2003 年に足を運びました。自前の旅行だったのでアラビア語の通訳はなく、泊めていただいた家の子どもが英語で通訳してくれたことも。取材には不十分ですが、パレスチナ人宅やイスラエルの学生寮に泊めていただき、日常の姿を見ました。

ガザに行くと、すれ違う少年たちが「ウエルカム トゥ ガザ」と声をかけてきます。「人間としての私たちの生活と現実を外の世界に伝えてほしい」と何人もの人に言われました。不公正が長年、国際社会で見逃されているのは、実情が知られていないからだ、という思いがパレスチナ人にはあります。今、状況は私が訪れた当時よりはるかに悪化し、ガザが国連の事務総長が「生き地獄」と表現する事態となってしまうと思いますが、声を託された者として伝えるべきことはあると思い、ここにいます。



今のパレスチナ／イスラエル問題の原点ともいえるのが、英国の三枚舌外交

1915 年：フサイン・マクマホン協定—第 1 次世界大戦後のアラブの独立支持を約束

1916 年：サイクス・ピコ協定—仏露と、戦後のオスマン帝国領土の分割を密約

1917 年：バルフォア宣言—ユダヤ人にパレスチナでの国家建設支持を約束

1924 年～25 年のこの地域の鉄道路線図によると、鉄道はエジプトからラファ、今のガザ市を  
通ってエルサレム、ハイファへとつながっています。大正時代にガザを通してエジプト  
とエルサレムの間を行き来した日本人も少なくありません。イスラエル建国前のこの地域  
には、今では考えられないこんな姿がありました。

1947 年：国連がイスラエルへの分割を決議

1948 年：イスラエル建国、第 1 次中東戦争

1956 年：第 2 次中東戦争、1967 年：第 3 次中東戦争、1973 年：第 4 次中東戦争

もとはパレスチナ人とユダヤ人が共存していましたが、イスラエル建国と続く 4 度の戦争  
でイスラエルが占領地を拡大。1993 年のオスロ合意でガザ地区とヨルダン川西岸が「パレ  
スチナ自治区」とされたものの、イスラエルはヨルダン川西岸で入植地を拡大し続け、パ  
レスチナの土地を奪ってきました。シリア領のゴラン高原も占領、併合し、入植地拡大を  
進めています。

私がこの地を最初に訪問した時には、中東和平交渉が始まっていました。龍谷大教授に話  
を聞く機会があり、占領とは？その下の暮らしとは？と自分の目で見たくなり、ヨルダン  
からヨルダン川を越えてイスラエル占領地の西岸に入りました。

ちなみにヨルダンには今、全世界のパレスチナ難民約 590 万人の 4 割、約 250 万人が住ん  
でいます。ヨルダン川は撮影禁止だったが、川は流量が少なく小川のように。水資源上もゴ  
ラン高原が重要であることを感じたが、イスラエルが上流で流路を変え、自国内の河川や  
湖に優先的に流れ込むようにしたのも原因です。

鉄条網・地雷注意の標識・農地はからから・パレスチナ人はヨルダン川を流れる水の使用  
を不許可・地下水の分配も不平等・イスラエル軍と入植者による灌漑設備の破壊

今世紀に入って、イスラエルは海水の淡水化技術、排水処理技術を発展させ、ヨルダン川  
への水の依存度は下がっていますが、パレスチナ人がヨルダン川の水にアクセスできない  
状況は今も続いています。

M・F さん：写真は何を作っているのですか？

大橋さん：作物を植える前だったので、分かりません。

※東エルサレムの入植地の写真、地図などを紹介

東エルサレムはパレスチナが首都と位置付けていますが、第3次中東戦争でイスラエルが占領。旧市街を取り囲むように入植地を配置するなど、実効支配を強めています。

ガザ地区は、京都市の縦半分より狭い土地に、京都府民全員よりやや少ない人数が住む地。1993年当時、中東和平交渉で自治先行の方針が報じられていて、エルサレムから乗り合いタクシーで入りました。道路に大きなブロック。イスラエル兵に銃を突き付けられながら検査。ラファは外出禁止令が出ていてひっそり。

ガザ地区には古い遺跡も。今はイスラエルが爆撃して多くを破壊。パレスチナの歴史を消し去ろうとしていると指摘されています。日本にも明治政府による廃仏毀釈で寺や仏像を破壊した歴史がありますが、ガザの文化遺産破壊はこの地の未来にとっても大きな損失。ガザ市は、第1次インティファダを受けてイスラエル軍が作ったバリエードだらけ。ラファ同様、人々が息を潜めて生活している印象の街でした。アル・アズハル大学ガザ校は当時、開校2年。ちなみに今回の戦闘前にはガザ地区の大学は十数に増えていたが、攻撃されていない大学はありません。

ガザ地区への人と物の出入りの制限は2007年に極端に厳しくなったが、それ以前からです。1991年からのインティファダ後、ガザ地区外へ労働・礼拝に出る許可が大きく制限されていました。外で働いていたパレスチナ人の大半が失業、パレスチナ人の土地を奪っての入植、殺害、難民キャンプの劣悪な住環境に不満が渦巻いていました。「イスラエル政府はわれわれを餓死させようとしている」。飢饉にある今から32年前の当時、すでにそんなイスラエル政府の意図を口にする人がいました。タクシーの運転手（パレスチナ人）は、和平交渉での譲歩に「期待しない。署名されても支持しない」と。

ガザ地区では不公正が目の前にごろりと横たわっていたのです。国際社会が長年、これほどの抑圧・暴力をただせないでいることへの驚きもありました。

8月末に帰国後、1993年9月13日にオスロ合意が署名に至りました。画期的でしたが、パレスチナ人、イスラエル人双方の譲歩反対の声や意見広告を見聞きした直後で、果たして人々が受け入れるだろうか、という疑問と不安も抱きました。ホロコーストの記憶を持つイスラエルの人々がなぜ、パレスチナ人の人権をここまで踏みにじるのか、という疑問も深まり、パレスチナの暫定自治が始まった1994年の末、再び現地へ向かいます。

暫定自治が先行的に始まったヨルダン川西岸の街エリコには、パレスチナ旗があふれ、「ユ

ダヤ人と共存できると思う」という声すら聞きました。オスロ合意前の前年とは街の雰囲気が変わっていました。

一方、ヘブロン、アラビア語でアル・ハリールは違いました。この年にユダヤ人入植者が聖地でテロ事件を起こし、イスラエル軍が行政、治安を握ったままの街です。早い時刻から店の営業が禁じられ、通りはひっそりとしていました。あちこちにあるバリケード。銃を手にパトロールするイスラエル兵。監視塔から見張られる暮らし。オスロ合意の翌年だというのに、ベツレヘムへ向かう途上の入植地エフラットの拡大が計画され、パレスチナ人が厳しいまなざしを向けていました。私が聞いた範囲では、アラファト PLO 議長の人気も高くありませんでした。オスロ合意の成果を実感できなかった、ということだろうと思います。

その後のヨルダン川西岸には、2002 年から高さ 8 メートルもの分離壁が築かれています。第 1 次中東戦争の停戦ラインを越えてパレスチナ側に食い込んでいる上、パレスチナ人の生活圏を分断。ヘブロン／アル・ハリールでは検問所が増え、人々の移動がさらに制限されています。ガザに世界の注目が集まっている間にも西岸では入植地の増加・拡大が加速し、入植者の暴力が激化しています。

今、国際社会から批判を浴びているのは「E1」という新しい入植地の建設。パレスチナを国家承認する方針を打ち出す国が増える中、国家としての独立を防ぐ狙いだそうだが、虐殺継続と入植地拡大に批判を強める国際社会に対して逆切れしたようなものです。

2 度目の旅の話に戻って、先行自治が始まったガザへ。前年には人々が息を潜めていたようだった街が一変、自治の喜びに満ちあふれていました。トーチやパレスチナ旗を手に、ファタハ創設 30 周年の前夜祭に集まった人たち。夜間外出禁止令が解け、初めての新年パーティーを歌と踊りで祝う人々の幸福感。アラファト議長の演説を聞こうと 3 万人が詰めかけた 1995 年 1 月 1 日の集会の熱気。新築、増築の建設ラッシュ。自治を手にした喜びと解放感がこれほどまでに大きいものなのか、希望が与えるもの、これまでの抑圧の大きさをあらためて思いました。

この 1994 年の旅では、第 3 次中東戦争以降イスラエルが占領しているシリア領のゴラン高原へも。破壊されたモスクやシリア人の家の基礎が残ります。国連が展開する非武装地帯の向こうにはシリアの街、クネイトラ。第 4 次中東戦争後、イスラエル軍が撤退した後には徹底的に破壊されていた街です。イスラエルの展望台の案内看板には「クネイトラをシリアにやった」とありました。昨年末、シリアのアサド政権が崩壊した直後にイスラエル軍が非武装地帯に侵入。軍事上の要衝であるヘルモン山山頂に駐留し続けていて、数日前

にもクネイトラ近郊への侵略が報じられています。

見ていただいての通り、ガザでの戦闘の起点は決して 2023 年 10 月 7 日のテロにはありません。テロに追い込んだのは、パレスチナ人が「助けて」と叫んでいるのに無関心で、イスラエルに加担すらしてきた国際社会です。今、オスロ合意の問題点がいわれませんが、合意で和平に希望の光が射したこともあった。両者が交渉のテーブルについたのに、国際社会が公平な解決に向けた交渉の進展を支えなかったことにも大きな問題があったと思います。

アメリカはイスラエルの肩を持ち続け、ドイツとともにイスラエルに武器を送り続けてきました。日本の年金基金の投資運用先にはイスラエルの軍事企業やイスラエル国債もあり、ジェノサイドを支えているといえます。防衛省のドローン大量購入に向けては輸入代理店がすでにイスラエル製を購入し、実証飛行をしています。ゴラン高原など占領地でつくられたワインも輸入されています。

かつてアパルトヘイト下の南アに対して同様、イスラエルに対しても B D S（ボイコット・投資撤収・制裁）を通じて加担を断ち、批判の意思を届ける必要があります。

ガザは今、「兵器の実験場」といわれています。標的候補を探し出す A I 兵器もあり、パレスチナ人は命をかけて国際社会に実情を伝えています。戦闘開始以降、外国人ジャーナリストはガザでの取材を禁じられ、殺害されたパレスチナ人ジャーナリストは約 200 人に上ります。この問題をめぐってアメリカ、ドイツなど表現の自由が損なわれている国も少なくありません。国際法は 2 度の大戦を経た人類の知恵であり、進歩。踏みにじられている今、表現の自由がまだしも保たれている日本から、国際社会の一員として「法の支配」へ声を上げることが大切です。

「ホロコーストの痛みを知るはずの国がどうして？」という疑問は今も解けないでいます。指摘されるのは、歴史の記憶のしかた。弱くてやられたから、自衛のためやられる前にやる、という意識。2023 年のテロを受けた犠牲者意識の高まり。ホロコーストは他の犯罪とは比較できない唯一無二のものとする考え方。教育と報道の問題。分離壁や移動規制強化でパレスチナ人との人間的なつながり、共感を失った一など。でも、まだどうも腑に落ちないのです。日本も過去にアジアを侵略、国際社会に背を向けた歴史があります。同じ過ちを繰り返さないためにも今後も考え続けたいと思っています。

M・F さん：エルサレムはキリスト教の発祥の地でもあるので、アメリカはイスラエルを支

持しているのでしょうか？

Y・H さん：「イギリスの三枚舌」という言い方がありましたが、複雑な経緯がありますね。

責任のある欧州諸国が積極的には解決に関与していませんね。直接的な痛みが伴っていないからでしょうか？欧米主導でないと解決はできないかもしれませんね。

大橋さん：フランス、イギリスはパレスチナの国家承認を持ち出してイスラエルに圧力をかけていますが、日本はアメリカの顔色をうかがったままです。

S・H さん：紀元前 14 世紀からの長い歴史があります。

大橋さん：ベトナムの戦争証跡博物館には、ベトナム人の首を手に提げて笑う米兵の写真が展示されていました。今、イスラエル兵は攻撃で崩れるガザの建物を背景に笑う姿をネットに上げる。戦場では人間が変わる。ドローンでの攻撃など遠隔操作が主となると、加害の痛みを感じにくくなって攻撃が激化するかもしれません。

● (?)：イスラエル兵の精神的なダメージも大きいそうですね。

大橋さん：自殺者が多く出ています。虐殺に加担すれば、人間は普通苦しむ。イスラエル国内にも、ジェノサイドだと攻撃に批判の声を上げる人があれば、入植地拡大に反対する平和団体もあります。

亀田さん：ネタニヤフ政権がイスラエルに続いている間は、ダメだと思います。やめるとどうなるでしょう？

大橋さん：収賄罪で起訴されたネタニヤフ首相が収監を避けるために政権維持へ戦争を続けているとの批判があります。外に敵をつくって攻撃を始めると政権の支持率が上がるのは歴史の常なので・・・。

亀田さん：アメリカもトランプが変われば変わるのでしょうか？

S・H さん：ノーベル平和賞は？

● (?)：国連の事務総長も任期満了が遠くない？

Y・H さん：アッバス議長などには、アメリカは入国ビザを出さないようです。国連が機能していないですね。ロシアに対しても安全保障の点で。

大橋さん：国連総会ではイスラエルへの決議が上がり続けてきましたが、法的拘束力がなく、イスラエルは耳を貸しません。

亀田さん：安保理にはアメリカの拒否権があるからですね。80 年前の戦争の戦勝国は、未だに強くて、ドイツや日本は弱いでしょう。

大橋さん：国連の人権専門家グループが今月、「緊急の国際行動がないと『もう二度と』という言葉はジェノサイドの防止ではなく、ガザでのパレスチナ人の生活の存在を指すものになる」と警告しているんですが、その危機感を私も共有しています。

亀田さん：もう 1 時近くになりました。今日はこれくらいにしましょうか？

児嶋：次回は、9 月 27 日（土）10：30～12：00 でガレリアであります。ゲストは、今日も来ておられた畑佳延さんです。タイトルは、「英語という風に吹かれて」です。

また、みなさんも来てくださいね。

感想（N・Kさんより）

「今日は、大変興味深くまた有意義な global session をありがとうございました。現地に行かれての生の写真やお話に、本やニュースからとは別の臨場感を感じました。また、危険なことをも淡々と語られる大橋さんのご様子に、ジャーナリストとしての矜持をも感じさせていただきました。

お話の中で、パレスチナの人々や子ども達がその地で暮らしていることが感じられました。その人々と共に文化や知をも抹殺する行為が行われている現実。かつての日本とも重なる歴史です。その中で、パレスチナとイスラエルの歴史をさかのぼり、イギリスの植民地政策にも触れられ、さらにその向こうの歴史をも感じさせるお話でした。

私が初めて「ユダヤ人」という言葉を知ったのは子どもの頃に読んだ「ベニスの商人」です。「最後の晩餐」にも「ユダ」は出できます（15世紀末）。キリスト教との関わりを思えば、はるかそれ以前からでしょう。そして今、日本に住む私達も、年金を通して直接関わっていると知りました。そんな複雑な事情は、どのように解決していけるのでしょうか。

印象的だった言葉は、「戦争の記憶の記録の仕方が問題」という言葉です。起こった事実はいくらでも変えられませんが、どのように受け止めて継承し、後の世代に引き継ぐかが大切という意味だと思います。もっと自国他国の歴史を学んで、自分との関わりとして考えなければならぬと思いました。ありがとうございました。」

#### 9月のGlobal Session

期日：2025年9月27日（土）10：30～12：00

ゲスト：畑佳延さん（元総合商社勤務）

タイトル：「英語という風に吹かれて」

#### 10月のGlobal Session

期日：2025年10月25日（土）10：30～12：00

場所：ギャラリー3階会議室

ゲスト：濱田雅子さん（講師は神戸からオンラインで）参加者はギャラリーで一緒に

タイトル：「服飾から見た生活文化」西洋服飾史講座シリーズ **エジプトの服飾**

10月25日のオンライン講座（GS）では、貴重な壁画や遺物を徹底解説いたします！

とりわけ、壁画に描かれた服装の特徴、階級別の服装の違いの解説を丁寧に、徹底して行っているのが、本講座の特徴です。

エジプト展の鑑賞にも、とても役立ちます。「ああ、エジプトのことなら知ってるよ、と言われる方は沢山、いらっしゃることでしょ。

古代エジプトの服装に隠された衝撃の真実！？ ～身分格差は死後も続く！？～ 古代

エジプト…それはピラミッド、ミイラ、そしてファラオ。謎と神秘に満ちた文明です。

でも、あなたは知っていますか？古代エジプトの服装には、驚くべき階級社会 が反映されていたことを！そう、服装は単なるファッションではありませんでした。生きている間はもちろん、死後の世界、冥界の審判にまで影響を与える、重要な身分証明 だったのです！